

久保田 順先生の人と学問

井上周八・田村信吾

1 久保田さんと鎌倉・市民アカデミア

1990年10月20日、私の立教大学定年退職記念号に、久保田順先生が『井上周八教授の人と学問』を寄せてくれたが、早いもので、あれからもう8年以上が経過している。

久保田さんが、私の記念号でしてくださった役割は、このたびは久保田さんと立教大学の大学院で同期生として、学生生活を共にし、多くの日々を論争して過ごした私と田村信吾さんが務めることになった。

久保田さんは、鎌倉アカデミアの前身、鎌倉大学校の最後の学生として、一年間在学している。鎌倉大学校が誕生したのは1946年3月31日である。材木座にある光明寺が教室であり、この光明寺を見つけてきたのが有名な学者服部之総氏（後に鎌倉大学校の学監となる）であった。そして学長はこれまた著名な学者三枝博音氏であった。

久保田さんが鎌倉大学校へ入学したのは1949年頃であり、当時18歳であった。

それから27年後に「鎌倉・市民アカデミア」が誕生し、久保田さんは事務局長に就任した。機関誌『アカデメイアの森』が創刊号を出したのは1977年5月1日である。それ以来今日にいたるまで、久保田さんは「生涯学習」の先駆者として、「市民アカデミア」の仕事をしている。

ところで、「アカデメイア」はプラトンの創立した学校の名前であり、アカデメイアは「アカデミー」という言葉の言源となっている。

古代ギリシアの哲学は自然哲学者としてターレスをはじめ多くの哲学者を出したが、それとともに人間哲学者も出した。その代表的哲学者が有名なソクラテスとプラトンとアリストテレスである。

プラトンの書いた『ソクラテスの弁明』は、1945年（敗戦の年）に私がパイロットとして北海道の八雲飛行場で特攻訓練を行っていたとき偶然手にして読んだ古典であり、いまでも当時の感動が残っている。

ところで、なぜ私が、鎌倉・市民アカデミアのことから書き始めたかという、それは、久保田さんの「人と学問」について考える場合に、久保田さんが鎌倉・市民アカデミアに注いだ情熱というか、愛情というか、がとても重要な意味をもっていると考えたからである。

とくに、この20年ばかりの期間は、久保田さんとアカデミアは切り離せないのである。

鎌倉・市民アカデミアが発足したのは昭和51年である。市民アカデミアは開かれた学校として、職業とか年齢とかに関係なく誰でもが自由に入学でき、いやになれば退学できる学校で、先生も生徒も手弁当で運営しており、地域的にも鎌倉市だけでなく藤沢、横須賀、あるいは相模原から東京までの人々が参加している。

かつての久保田さんが入学した鎌倉大学は青年たちの教育の場であり、文学科、演劇科、映画科、産業科という四つの科があったが、市民アカデミアは老若男女を問わず、あらゆるテーマで学習を行っている。久保田さんも、例えばロマン・ロランをテーマにして連続講演を行っており、ロマン・ロランの『ベートーベンの生涯』や『ミケランジェロの生涯』をテキストにした講演などは好評を拍していた。

久保田さんは鎌倉・市民アカデミアに、この20年あまり、情熱をかたむけて、生き生きと楽しく取り組んできたのであり、ここに私は久保田さんの人間性がはっきりと見えるような気がする。

この間、久保田さんは新聞や雑誌にアカデミアや生涯学習についての多数の論文を発表し、また『アカデメイアの森』をはじめ、様々な弘報文献を作成し、さらに毎年度の講座案内を発表し、多彩な講座内容を充実させてきた。その労力はなみなみならぬものがあつたであろう。

鎌倉・市民アカデミアに傾けた情熱は、勿論、久保田ゼミにもそそがれており、久保田ゼミOB塾をつくり卒業生との交流も強めている。その活動状況は『立教大学久保田ゼミ・OB会報』の各号に詳しく紹介されている。

2 大学院生時代の思い出

私と久保田さんとの交友は、いまから40年余も前の立教大学の院生時代から始まった。とくに親しくしていたのは田村信吾さん（立教大学副図書館長として退任）、市川深さん（東京経済大学教授）、および久保田さんと私であり、この四人組は卒業後も旅行などをともにして交友を深めている。院生時代は、大学院のゼミが終了したのち、新宿の中村屋へ席を移し、長時間『資本論』を中心とした討論を行ったりした。その様な時には、若さのせいもあって唯我独尊的な主張を私などはよくしたような気がする。しかし、こうした討論は、『資本論』の理解を深める上で相当に役立ったと私は思う。若い久保田さんに、さんざん批判された記憶も私にはある。しかし、久保田さんは礼儀正しい紳士であった。ある時三宅義夫教授に私が「久保田さんは紳士ですね」と言ったところ、三宅先生は「そうですね。もっとも井上君に比べれば誰でも皆紳士ですよ」と言われてしまったことがある。

久保田さんがどのような人か、正直言って私にはわからないこともある。なかなか自負心の強い人だな、と思ったこともある。私より多方面に関心を持ち、私の知らないこともよく知っている人だなあと考えたこともある。趣味も私よりはるかに広い。

久保田さんは歌も上手である。「鶯の絡まるチャペルで祈りを捧げた日」で始まる『学生時代』や「卒業までの半年で答えを出すと言うけれど」で始まる『青春時代』などの歌をはじめ実に多くの歌を知っていた。その後も一泊旅行などの時「カラオケ」で夜遅くまで歌い続けたものである。

久保田さんはゼミのコンパでも学生たちと多くの歌をうたってきた。その歌の文句がプリントされたものが私の手許にいくつかあるが、その中に『久保田ゼミの歌』というのものもある。歌詞はどうやら久保田さんが書いたものらしい。また久保田さんはゼミ旅行でよく野球をしていた。久保田さんは教師になっても学生時代の気持ちを持ち続けていたのである。

久保田さんは関東学院大学の教師としてその学究生活を本格化し、早くも20代のなかば頃から次々と論文を発表し、34歳で著書『貿易の理論と政策』（新評論社）を発表している。

久保田さんが関東学院大学から立教大学の経済学部へ転勤するに際して、私は関東学院大学を訪問して当時の富田学部長に面会してお願いしたことがある。そしてそれ以来同僚としてより深い交際を続けてきた。

3 久保田さんの学問

久保田さんの業績リストを見ても解るように、久保田さんは相当の努力家である。

久保田さんは一時、横浜国立大学の非常勤講師をしていたが、その時、社会主義についての専門家である大崎平八郎教授との共著として『世界経済論』（青木書店）を1970年9月に出版した。この著書は、大学紛争の激化していた当時、約三年の間、理論と思想の交換を緊密化させて出版した共同の労作であるが、380頁に及ぶその内容は、専門家ではない私が読んでも極めて充実している。第1章「世界経済論の対象領域」、第二章「資本主義の世界的形成」、第三章「帝国主義体制の確立」、第四章「体制危機の展開」、第五章「体制危機の深化」、第六章「体制危機と日本資本主義」から成っている。本書は最後に「70年代には、いずれにしても戦後日本帝国主義は本格的段階に到達しよう。日本帝国主義の存立基盤を、国内支配と対外支配の両面にわたって強化していく過程が、同時にまた日本帝国主義の特殊性として、アメリカ帝国主義を支柱とする世界的体系の再編成に全的に組み入れられていく過程にほかならない。…資本主義から社会主義への移行期・過渡期の世界的段階の中で、(1)それらの諸特徴を全面開花させている日本帝国主義が、その「生命線」をどのように延ばしてゆくのだろうか？ (2)また世界的な変革運動の一環として位置づけられる日本の変革主体の形成はどのように推し進められるのだろうか？ 我々の『世界経済論』も、ついにわが日本の、かつ世界的な、その究極の課題に回帰せざるを得ないのである」と述べているが、いまや21世紀を目前にしている今日

においても、この二つの深題は残されているのである。

1973年12月に久保田さんは『世界経済の戦後構造』を新評論社の「現代経済学叢書」の一冊として出版した。

この著書の主要参考文献を見てもわかるように、両大戦間に関する文献及び戦後構造に関する文献として、多数の重要文献を取り上げ、そこに提示された問題や諸氏の見解を久保田さんは慎重に検討している。大崎教授との共著と本書により久保田さんの学界における地位は明確となったと私は思う。

1974年6月に、久保田さんと私と和田八束教授の共著で『現代日本経済の批判』（文真堂）を出版した。その書評が雑誌「エコノミスト」で法政大学教授古川哲氏によって「鋭い現状分析の書」としてなされたが、そこで「本書は最新の日本経済の局面を、マルクス経済学の立場から分析した日本経済に関する批判的時論ともいべきものである。……本書は部分的にやや不親切な構成となっている面もあるが、単なるジャーナリスチックな時論ではない日本経済の現状の鋭い分析の書である」と古川教授は書いてくださった。

久保田さんは1993年1月に『市民連帯論としての第三世界』（文真堂360頁）を編著として出版した。久保田さんはこの編著出版の10年前にも『自力更正論としての第三世界』（文真堂）を編著として出版しているが、私が感心するのは、これからの編著を分担執筆している久保田ゼミ出身者の顔ぶれである。私も久保田ゼミより長い期間、井上ゼミを担当してきたが、私は久保田さんのように教え子を学者・研究者として世に出すことは出来なかった。学者となった教え子もゼロではないが、それも、私の力でそうなったのではない。しかし、久保田さんは久保田ゼミ出身者の郭洋春氏を立教大学に残し、また戸崎純氏を東京都立商科短大へ、榎守哲士氏を札幌学院大学商学部へ、小池洋一氏をアジア経済研究所員へ、高中公男氏をスタンフォード大学研究員へと進出させ、また湧井秀行氏、田部井英夫氏をはじめとする優秀なゼミ生たちを世に送り出している。

久保田さんの学問については、私の専攻分野ではないので、ひとまず筆を置くことにするが、次に久保田さんと朝鮮との関係について若干述べておこう。

4 久保田さんと朝鮮

1980年に東京大学名誉教授の高橋勇治先生を団長とし、私が秘書長となって6名が約三週間ほど訪朝した。その中の一人が久保田さんであった。手許にある最近の久保田さんの手紙を読んでいたら次のような一節が目にとまった。

「……御便りによりますと八月、団長として訪朝の由、分けても大事な現状下の共和国入り、大きな意義ある訪朝と期待いたします。すでに昔の話と申すべきでしょうか。大兄の有り難いご配慮で訪朝のお供に加えていただきました。今日、つくづくその折りご同道できてよかったですな！と感謝しております。」

久保田さんは、冷静に共和国を見てきたようである。

1979年に朝鮮民主主義人民共和国の万寿台芸術団がパリを訪問して「花を売る乙女」を上演したが、当時フランスに留学中の久保田さんはこの公演を鑑賞し、在日朝鮮人の友人に宛てて送った手紙が『朝鮮時報』1979年9月17日号に発表された。そこには次のように書かれていた。

「パリ公演は6月28日から7月5日までで開演前からなかなかの評判をよんでいたようです。私はその最終日をえらんでパリ大学の田部井さん、中央大学の佐藤清さんを誘って出掛けました。公演の会場はパリではオペラ座と並んで格式のあるテアトル・シャンゼリゼで、前に私もボリーニの演奏でベートーベンのアパッシヨナタを聴いた劇場です。今回はピョンヤンの人々への激励の気持ちも手伝って、特等ボックスを奮発した次第です。懐かしい主題曲と共に幕が上がって、東京公演以来、幾年ぶりでしょうか。登場する人々と再会することとなりました。フランス語の字幕も適切で、満員のフランス人男女の胸にもずっしりとした感動がストレートに入って行ったようです。そうでなければあの熱狂的なカーテンコールの繰り返しはパリではありえないものです。フランス人の男女も皆感動して泣きました。」

この一文を見ても久保田さんの人柄と朝鮮に対する気持ちがよく解れると思う。

5 これからの久保田さん

私は『久保田順先生の人と学問』を書くにあたり、あらためて『井上周八教授の人と学問—ヒューマニストの意義—』を読み返してみた。誠に有り難い一文である。

久保田さんは50歳台の半ば以降私が取り組んできた社会主義朝鮮とその指導思想であるチュチェ思想の研究について、「わが井上周八さんにおける思想的到達点とその世界史的展望は、旗色鮮明にして確信に満ちたものであった。……終りに、友垣に結ばれる一人として希求する一点は、学兄が確信を持って取り組んでいる終生の仕事を、思想としても実態としても掘り下げ、更に掘り下げて、日本の民衆のもっと広汎な層に、当たり前前の市民に、より一層の説得力を持って語り続けて下さることである」と述べているが、私に向けられたこの言葉は何よりの言葉だと私は深く感謝している。

かって久保田さんは私に次のように語ったことがある。

「私は鎌倉・市民アカデミアの活動を最後まで行うつもりでいます。井上さんも今やっている朝鮮問題を最後まで成し遂げてください。」

この言葉には信念の人としての久保田さんがうかがえる。歌をうたっているときの久保田さんを見て私はよく、この人はロマンチックな感情の人だなと思ったことがあるが、久保田さんは、多くの人の場合もそうであるが、信念の人でもあり、感情の人でもある。

久保田さんは数年前に手術をしている。いつも健康には人一倍注意していたので、経過は順調であった。聖路加病院で手術に立ち会った私は、その報告を教授会でしたが、無事定年を終えられた久保田さんのこれからの課題は、健康に留意しながら、そのライフワークである鎌倉

・市民アカデミアに献身することであろう。久保田さんの今後の御多幸と御活躍を祈念しつつ……。

(井上 周八)

学びの道すじ・三人の学友と久保田さんと

定年ご退職、ごくろうさまでした。さぞ、いろいろな感懐がおありのことでしょう。思えば、久保田さんに初めてお会いしたのは1954年4月、立教大学経済学部大学院修士課程に入学した時でした。以来43年にわたり変わらぬご厚誼をいただいて来ました。それは何よりも、当時の大学院での学習生活が、2年間という限られた期間であったとはいえ、マルクス「資本論」という大きな目標に向かって、知への熱い志を共有していた。そして、その探求の日々を共に生きて来たという信頼に根ざしていたものと思っております。

当時、山本二三丸先生の指導のもとで、4人の仲間、井上周八さん（経済学部名誉教授）、市川深さん（東京経済大学教授）、久保田さん、それに私がいつのまにか小さなグループを作って、よく議論をしておりました。とくに、学校のゼミが終わった後、何故か新宿の中村屋に寄って中華饅頭を食べながら討論のつづきをしたものでした。鑑賞眼の高い久保田さんによると、そこは中村彝の「エロシエンコ氏像」の下であり、「私たちの『青春の日』の原風景」であると書いておられましたが、その通りだと思います。もちろん、討論とはいっても、4人が同じレベルで議論ができたわけではなく、年齢も上で、立教大学と東京商大（現一橋大学）の二つの大学を卒業して来た井上さんが、おのずから議論をリードしていたと思います。その中で、久保田さんをご出身の関東学院大学の派遣留学生という形で（同大学の「秘蔵っ子」と聞かされたものでした。）大学院に来ておられたと記憶していますが、当時年齢は若くても、すでに気鋭の研究者としての風格をもっておられて、いいかげんなことを言うと足元をすくわれたものでした。修士論文も「経済学の歴史と理論」という視野の大きなテーマを目指し、いずれ「資本論」からレーニン「帝国主義論」への理論的展開を展望しておられました。一方、私は、ポール・M・スウィージー「資本主義発展の理論」中の『質的価値の問題』『量的価値の問題』の根拠とされたフランツ・ペトリー「マルクス価値論の社会的内容」を批判的に検討するという、もっぱら価値論の方法をテーマにして、限られた領域であくせくしておりました。

そんな中で、ある時、私たちがゼミでの議論に飽きたらず、往復書簡による小さな論争を久保田さんと交わしたことを今でも鮮明に覚えております。それは、市場価値と市場価格の本質とその関係といった問題についての論争だったと思いますが、どちらも譲らず、何回も手紙のやりとりをしたものでした。この論争で、どちらに軍配が上がったのかはわかりませんでした。お陰で市場価値論の理解が深まったことだけは確かでした。論争の内容は幼稚なものであったとしても、一つのことを追求する営為を共有しえたことの幸せを今はなつかしく思い起こ

すことができます。

当時から、久保田さんの研究者としての資質として一番感ずるのは“視野の大きさ”でした。その思考は「資本論」－「帝国主義論」の研究を基礎として、1982年から84年にかけて、アンリ・クロード「多国籍企業と帝国主義」の訳業、および「自力更正論としての第三世界」（いずれも文眞堂）に結実しました。また、この間に、研究を方向づける思想をつぎのように語っています。「帝国主義論の古典（レーニン）が論理的展開の中で究極の帰結として導きだしたのも、戦争の必然性であり、戦争を必然化させる社会構造の解明であった。戦争について、死者と語り続け生者とも語り合いたいというのが自分の仕事の軸心をなすエートスであった。」（『鎌倉・市民アカデミア』現代企画室144頁）そして、このことを実証すべく、その後の世界史の大きな変貌の中で、現在も「市民連帯論としての第三世界」および「国際平和論・その思想と市民」の理論構築に力を注がれているものと拝察致しております。

このような研究者としての資質と共に、一面で、久保田さんを際立たせるものに、身近なものに対するやさしさがあります。私的には、私など数え切れぬ恩恵に浴して来ましたが、公の場面で結実したのが、鎌倉市民アカデミアでの活動でしょう。その活動は一卷の書（『鎌倉・市民アカデミアーもうひとつの生涯学習』現代企画室1991年）となって報告されています。1976年の春、それは「民衆大学創造へのこころみ」の一つとして、あるいは「市井人の学習組織」として作られたとうかがっております。アカデミアの運営は、いうまでもなく優れて、組織活動であり、久保田さんのオーガナイザーとしての資質を問うものでありましたでしょう。その組織活動が、身近なものに対するやさしさに裏打ちされたものであったことが、その成功の原因ではなかったでしょうか？ ご自身、こんな風におっしゃっています。「私は『柔弱』という言葉を好んできた。なにも或る時期に愛読した老子がどのと言うのではなくて、ただ私自身、根が『柔弱』で、生得のものとしてそんな性癖を隠し持つという意識である。そうした意識の眼からすると、抑圧的、権力的なものが焙りだされるようにうかび出て、容易に証しを得るのである。」と。確かにそうでした。いつでも、久保田さんのやさしさは、権力的、抑圧的なものに対する覚めた眼とそれに対抗する強い意志とが結びついていました。アカデミアを組織し、運営していくに当たって、「要は組織の中身であって、ひとびとの人間関係そのものが即組織であるような『柔弱』な『組織』であるかどうかである。」まさに、このことを試されたのでしょう。この思想に導かれて、市民アカデミアは1976年第1期から1990年第25期までの期間だけでも、240の講座、12の記念講演、そして4つのフォーラムを開設して来ました。この講座には、立教大学の各学部にわたる講師が参集し、その他にも講座全体では、各界の多彩なひとびとが講座を開いて来ました。そして、特徴的なことは、市民アカデミアに参加した「ひとびとは語り手、聴き手、世話人などであることを自由に選びとり、さらに自らを自在に翻身させながら歩んできた。（エピローグ）」ことでしょう。ここに久保田さんの教育者として

の情熱が結実した姿をみることができます。

久保田さんとは一度、同じ職場である立教大学の中で、一緒に仕事をしたことがありました。1969～70年という激動の時代に組合活動を共にしたことでした。久保田さんは初代書記長として、私は副委員長として辛酸を嘗めたことを記憶しています。当時は「大学問題」と「70年問題」という二つの課題をかかえ、また経済の面では「経済成長」のひずみ、その帰結としてインフレと公害が明らかになってきた時期でした。書記長に就任した久保田さんは、組合員の結束をもとめ困難な課題に取り組まれました。当時は「大学改革」をめぐって、学内の意見はさまざまに分裂し、組合員の意志をまとめることは大変困難でした。そんな中で、ぎりぎりの合意を求めるものとして、1. 生活と権利に関するたたかい 2. 教育と研究を発展させるたたかい 3. 反動的な政治に対するたたかい、という簡潔で解りやすい柱を立てて、組合員の結束を作りあげていきました。当時の『組合ニュース』の“プロフィール”によると、久保田さんは「わが立教に専任としてこられるようになってからまだ日が浅いと謙虚にいわれるが、前任校の関東学院大学で、すでに副委員長、書記長をつとめられており、教職員組合の運動経験は、むしろ人一倍豊富であり、また『安保体制』の分析は氏のまさに専門分野である。」という“期待の俊英”として紹介されました。数知れぬ活動の中でも記憶されるのは、最初の年末手当交渉において、当局が紛争による損害（改修等経費増）を理由に「マイナス回答」をつきつけてきたことに対し、ただちに、それが教職員の「賃金カット」によって穴埋めしようとする紛争責任転嫁であるとして、当局の非礼かつ安直な態度に猛然と強い怒りを示し組合をリードした姿でした。そして、「この紛争責任転嫁論は、三ヶ月半に及ぶ闘争によって粉碎された。」（前記「報告」）のでした。とにかく、この時代は、組合本来の目的である教職員の生活と権利を守るたたかいに専念する事が許されず、「紛争解決」「大学改革」という課題を絶えず意識して、運動を進めなければなりませんでした。この重味に耐えて、抜群のバランス感覚をもって、書記長というかなめの役割を果たされた活動ぶりをなつかしく思い出します。

最後に、どうしてもお伝えしておきたいのは、大学改革が議論される中で、大学構成員としての職員の存在とその位置づけについて、久保田さんが組合の立場から積極的に発言されたことです。職員、実験補助員、校務職員の位置を確認し、その地位の向上に尽力されたことには、元職員の一員として、今も深く感謝の念を覚えています。

では、久保田さんの学問的業績とは余り関係のない思い出話ばかりをならびたてることになってしまったことをお詫びし、筆をおかせていただきます。

(田村信吾)